

H25地域協働研究（教員提案型・前期）

RE-05「勤務所属組織をもたないベテラン看護師の被災地住民への健康支援とそのプロセスに関する研究」

研究代表者：看護学部 教授 三浦まゆみ

研究メンバー：蛸崎奈津子、平野昭彦、野口恭子、渡辺幸枝、田口美喜子、蘇武彩加（看護学部）

<要 旨>

東日本大震災直後から被災地で継続的に活動している内陸部在住のベテラン看護師ボランティアグループの活動は①山田町仮設住宅住民との月1回の交流、②遠野まごころネットと連携した大槌町住民への健康支援、である。①に関しては、前年度の研究成果報告集で報告した。本研究では、活動が続けていく中で看護職だけの活動に限界を感じ、他組織との協働した活動へと踏み出した②の活動について、プロセス及び活動からの学びを明らかにすることができたので報告する。

1 研究の概要（背景・目的等）

東日本大震災直後から被災地へ出向き看護職としてできることを…、を合言葉に活動してきた看護職のボランティアグループが、震災1年後にNPO法人遠野まごころネット（以下、まごころネット）との連携を求め、大槌町の住民に対する健康支援を実践してきた。彼女たちの活動の軌跡から、保健医療以外の他組織との連携という位置づけの中で、改めて被災地における看護の強みとは何か、を明らかにすることを目的に取り組んだ。

2 研究の内容（方法・経過等）

方法は内陸部に居住する退職看護師有志11名で結成されたボランティアグループ「盛岡なでしこ」を研究パートナーとし、彼女たちの月1～2回の被災地への活動について情報共有しながら、時に共に行動し、現地の状況、活動の様子を把握していった。そして、実際に活動している看護師がその活動をどのように捉えているのかを明らかにすることを試みた。

研究は昨年に引き続きであり、今回の報告は平成24年1月～平成26年1月までの活動内容である。データ収集は2回行い、1回目は平成25年12月某日で、まごころネットとの連携活動について（遠野まごころネットは平成25年10月で大槌町の個別支援を停止している）、2回目は平成26年1月某日で、まごころネットで活動したボランティア2名が設立した大槌生活サポートステーションとの連携活動についてである。メンバーの中で承諾が得られた5名（平均年齢65.5歳、平均臨床経験年数37.5年）に、約1時間のグループインタビューを実施した。

インタビュー内容は、①まごころネットとの活動プロセス、②大槌生活サポートステーションとのつながりによる支援活動の具体、③看護職者が行う災害時支援活動について思うこと、である。

分析方法は得られたデータを逐語録にした後、コード化し、類似内容をサブカテゴリー、カテゴリーに分類した。

なお、本研究は岩手県立大学倫理委員会の承認を得た。

3 これまで得られた研究の成果

1) <平成24年1月～平成25年10月までの遠野まごころネットとの活動プロセス>

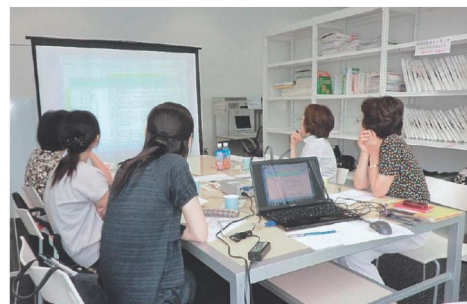
この時期は、4つのプロセス【 】と8つの思い〔 〕が見出された。

(1)【看護職だけで活動することや組織を持たないで活動することの限界を感じ、ボランティア組織であるまごころネットに相談する】

(2)活動のきっかけに【大槌町で戸別訪問の活動に加わる】と、御用聞きのような活動を体験し、〔自分たちはこの組織に必要なのか思い悩み断わろう〕とした。しかし、まごころネットのスタッフに落胆されたことから、〔組織を持たないで活動することの限界を感じつつも自分たちは必要とされているかもしれない〕と感じた。

(3)【まごころネットで私たち看護職の価値が認められ、大槌町で仮設住宅訪問を支援する】

この時期、メンバーはこれまで大槌生活支援チームの個別訪問記録からのスクリーニングの見直し作業を依頼され、大槌町の事務所と盛岡・アイーナ6F NPO活動交流センター団体活動室とで、遠隔会議を開催した。見守りの必要度が高い人々を抽出し、訪問頻度を高いと判定した住民に対し、まごころネットのスタッフと共に個別訪問するという意図的活動になっていった。なお、この会議には大学の教員も参画した。



遠隔会議 アイーナにて

(4)【まごころネットの予算等の問題で規模が縮小し、大槌町での活動を継続できる見通しが立たなくなる】が、〔まごころネットでの活動の見通しが立たなくなる中で

活動をアピールしたい」と感じると同時に、「まごころネットの一員として活動する中でボランティア参加者の優しさと自律しているすばらしさに感心」し、「まごころネットに加わって参加することで看護職という専門職の強みを感じる」ことをしていた。

2) <平成26年4月～平成26年12月までの大槌町での健康支援活動>

この時期は、まごころネットから独立した2名が設立した大槌生活サポートステーションとのつながりの中で活動を再開した。その活動内容のインタビューから13カテゴリ【 】が見出された。< >はサブカテゴリを示す。

(1)支援活動の前提として【現地とのスタッフのつながり】があり、活動としては【要フォロー者への継続訪問の実施】【要フォロー者の情報共有】【イベントでの救護活動】であった。

(2)活動にあたっては、<血圧計はコミュニケーションを図るための道具になる><相手に警戒感を与えないような看護師の雰囲気がある><さりげない関わりや見守りで相手を気にかける>など【看護職としての強み】を活かしながら行っていた。

また、<病院での対処との違いに戸惑った>ものの、<各自の得意分野を活かした対応ができた>といった【看護師同士のフォロー】があった。

(3)被災者と関わる上で、<看護師であることを声高に言わない>ことで<自然体で接することができる>、被災者から見て<組織に属さないから気軽に話せる><地元の人ではないから相手も気楽に話せる>ことから【外部ボランティアとして程よい距離感】を持ちながら活動していた。

(4)ボランティアとしての支援活動を通して、<組織としての規制がなく自由に話し合いながら活動できる><活動が負担にならず無理なく継続できる>ことから【無理なく自由に活動できる】こと、<多くの人とつながることによって自身の社会性が広がった><人を多面的に見ることができるようになった>から【自分自身の成長を感じる】ことができていた。

さらに、【他のボランティアに被災者も自分自身も励まされている】【支援者への支援をしたい】【組織・ボランティアが了解しあって活動している】と感じている。

(5)一方で、<行政との情報共有ができない><組織ではないため、日々の支援や経過確認ができないことにジレンマを感じる>という【組織として活動できないことへのジレンマを感じる】というじれったさがあった。

ベテラン看護師は、ボランティアとして活動する中でも看護師としての豊富な知識や経験を活用し、特に病気や問題を抱える要フォロー者への継続訪問を主に行っていた。ボランティアだからこそ気負いなく、また他のボランティアとのつながりから自身の成長を感じていた。

一般ボランティアは熟年女性が少ない。彼女たちのベテランパワーがボランティアの方々への健康支援となっていたことも大きな業績である。

一方で、情報共有が強調されるものの、それが実際には非常に難しい課題であることも今回のインタビューで改めて浮き彫りになった。



大槌生活サポートステーションにて

4 今後の具体的な展開

昨年報告した山田町仮設住宅の訪問にあわせ、大槌町での継続的訪問は、DMATや保健師活動というこれまでの組織的活動とは異なる、自由な動きの中での新たな看護活動を示してくれた。一般ボランティアにうまく溶け込み、頼られる存在としての「盛岡なでしこ」の方々は、現場では臨機応変が求められることが日常茶飯事で、そのなかでこれまで培った看護の豊富な体験が大きな武器になっている。ボランティア結成は、日ごろの人的ネットワークがきっかけであった。彼女たちだからできた、という特殊事例として終わらせるのではなく、日ごろの自分たちのつながりがあってこそ、と再認識している。それなしには、システム（特にも人づくりに関する）は継続しないように思われる。

5 その他（参考文献・謝辞等）

本研究にご協力いただきました「盛岡なでしこ」の皆様は心から感謝申し上げます。